

# 「一人」で「一緒」に生きること —ジェノヴァの地域医療が 示唆する自立と支援の弁証法



岡本雅史

(成蹊大学理工学部 共同研究員)

## はじめに

前回までのこの連載記事で紹介がありましたが、筆者は精神科医の山川百合子氏や心理言語学者の榎本美香氏、そして人類学者の松嶋健氏たちと一緒に、高次脳機能障害や精神障害を抱える人たちが日常生活を営むうえで、どうしたら自然なコミュニケーションを可能にするかを研究するプロジェクトに参加しています。特に、筆者は認知言語学という、さまざまな言語現象を人間の一般的な認知能力という観点で分析する学問の出自であり、そうした分析手法を用いて日常的なコミュニケーションを研究しています。

ここで簡単に認知言語学について説明しておきましょう。認知言語学(cognitive linguistics)は1980年代にロナルド・W・ラネカーとジョージ・レイコフを中心に創設された、比較的新しい学問です。認知言語学では、従来の言語学と異なり、言語の文法や意味などが人間と切り離された特別なシステムと見るのではなく、人間の認知能力、特に言語で表現しようとしている外界の出来事をどのように切り取り、どこに焦点を当てて言語化するのかというところに着目します<sup>1)</sup>。例えば、ペットボトル入りのお茶が半分残っているときに、同一の事態にもかかわらず、話し手は「お茶がまだ半分ある」と言ったり、「お茶がもう半分しかない」と言ったりします。また、「半分入ってる」と言う人もいれば、「半分空いてる」と言う人もいます。要するに、これまで言語というのは外界の出来事をあたかも写真を撮るよう

に客観的に表現するものだと考えられてきたわけですが、話し手によってどのようにその出来事を見るかは異なっている、したがって、話し手が認知する世界は客観的なものではなく、それぞれの主観的な像なのであり(筆者はこれを「リアリティ」と呼んでいます)、言語はそうした話し手の主観性を反映したものだのとらえるのです。筆者はこうした認知言語学的手法でコミュニケーションがどのようにして円滑に進行するのか、またどうして齟齬があった場合にうまく解決できるのかについて考えてきました。

## コミュニケーションの多重性

ところで、一口にコミュニケーションと言っても、会話など主に言語で行うコミュニケーションもあれば、ジェスチャーや表情などで非言語的な情報を伝えることが重要なコミュニケーションもあります。人類学者であり、家族療法の祖でもあるグレゴリー・ベイトソン<sup>2)</sup>は「ダブル・バインド(二重拘束)」という概念で統合失調症の発生原因を突き止めようとしてきました。例えば、母親と子どものやりとりの中で「あなたを愛しているからこちらに来なさい」と言いながら、子どもが近づくと強張った態度や表情を見せてしまう母親に対して、子どもは近づいてよいのか悪いのかわからなくなり、こうした状況が繰り返して生じることで精神的な外傷を引き起こすのだと説明されました。これは、直接ことばで言及されているメッセージ(=「愛しているから近づいて」と、それとは別のレベルにあってしばしば非

言語的に表出されるメタ・メッセージ(=「愛していないから近づかないで」とが互いに矛盾することによって、そのいずれに対して応答してよいのかわからないという「ダブル・バインド状況」であると考えられます。現在ではこうしたダブル・バインド状況が統合失調症の本質的な原因であるとは考えられていませんが、実はこうしたダブル・バインド状況は、そもそもわれわれのコミュニケーションが常に二重の(場合によっては多重の)レベルで行われており、特に言語情報と非言語情報が異なるレベルでコミュニケーションに関わっていることに由来しています。他人の予想外の応答に対して戸惑いつつ、なんとかしてその真意を探ろうとした経験は誰にもあることだと思いますが、日常的なコミュニケーションとは、単に表にあらわれたことばだけではなく、表情や態度、さらにはその場の状況などのさまざまな情報を手がかりにして、互いが本当に伝えたいことを知ろうとする不断の営みであると言えます。

そうした背景から、筆者は言語学者でありながら、言語だけを見てはコミュニケーションの本質を理解することはできないことを痛感し、コミュニケーションを成り立たせている言語と非言語の関係について深い関心を寄せてきました。先述のとおり、認知言語学は言語を特殊で独立した一つの記号システムとしては見ません。むしろ、われわれが世界をどのようにとらえて活動しているのかを、(あえて)言語の側から浮かび上がらせようとする言語学なのです。したがって、筆者は日常的なさまざまなコミュニケーション場面のことばとしてあらわされた現象、特に通常のやり方ではスムーズにことばが理解されないような場面に着目して研究を進めてきました。例えば、アイロニー(日本語でいう「皮肉」)はことばを文字どおり受け取ってしまうと話し手の意図がわからなくなる現象です。このアイロニーが単なる言語メッセージではなく、伝えようとしている皮肉な状況を指摘したり、わざと状況と発話の間に齟齬をつくり出したり、相手の発話や考えを模倣することで相手を皮肉ったりするというような、コミュニケーションの多重性を最大限に利用したレトリックであることを明らかにしました<sup>3)</sup>。また、最

近では漫才のボケとツッコミに見られるような、意図的にダブル・バインド状況をつくり出し、それをツッコミによって解消させるような対話についても研究を進めています。その意味で、先にベイトソンが挙げた母子のやりとりで、子どもが「どっちやねん!」とツッコミが入れられるような状況を生み出すことができれば、両者が陥っている病理的な事態を緩和することができるのではないかと常々考えています。

## コミュニケーション障害に接して

さて、こうした研究背景を持っている筆者ですが、榎本氏たちと先述した研究プロジェクトを行う中で、北関東にある複数の精神科医療施設を見学し、実際に利用者さんたちとコミュニケーションする機会を得たことはとても重要な経験となりました。われわれのプロジェクトでは、3人がテーブルを囲んでサイコロトーク(「ごきげんよう」というテレビ番組で使われているあのサイコロです)を行い、日常的なトピックで会話するシーンを収録して分析しています。通常は慢性期の統合失調症の患者さんや高次脳機能障害の患者さんたちの会話を収録するのですが、やはり外から観察するだけではわからないこともあるので、いくつかの会話セッションでは筆者自身が参加者の一人として彼らとの会話の輪に入らせてもらいました。もちろん読者の皆さんにはご承知のとおり、一口に統合失調症や高次脳機能障害と言ってもさまざまな臨床的症狀や障害の程度があり、十把一からげに語ることはできません。しかし、筆者にとって非常に興味深かったのは、収録に参加していただいた誰もが自分自身の抱える問題のある程度自覚しており、それについて自発的に言及するにもかわらぬ、どこか硬直した会話のやりとりになりがちであることでした。

われわれはコミュニケーションを行ううえで、単に自分の言いたいことを表現するだけではなく、聞き手がどのような知識状態や心理状態にあるかを考慮しつつ(他者認知)、自分の発言で相手がどのような印象を抱いたり、自分がどう思われているかを認知したり(解釈的自己認知)することで、会話の流



写真1 ジェノヴァ郊外のデイセンター



写真2 デイセンターの食堂

れや他者との相互行為を調節します。しかし、コミュニケーションに障害を持つ人々（CH）は、自分の話を順序立てて説明することが困難であったり、それができたとしても相手の話を相手が望む文脈でとらえることができなかつたりします。筆者が参加したある会話セッションでは、長い間統合失調症を患っている女性と、交通事故により前頭葉が障害された男性と3人で日常的なトピックについて30分ほど話をしたのですが、女性は自分が興味のある音楽の話やアニメの話題を筆者に聞いてもらいたいようで、決して最後まで2人のトピックが重なり合うことはありませんでした。収録した映像を見ると、筆者が懸命に2人の話の「良い聞き手」となるように振舞っている様子がありありとかがえ、その意味で過剰な他者配慮を行っている不自然な筆者自身がそこに観察されました。筆者に足りなかったのは、CHに対する「知識」や「経験」だったのでしょうか？それとも自然なコミュニケーションを達成するために必要な「時間」だったのでしょうか？

### 「通う」ことと「共に生きる」こと —ジェノヴァの地域精神医療の現場から

その答えはいったん保留して、今回の連載記事のメインテーマであるイタリアの地域医療について筆者が経験し感じたことをお知らせしましょう。第1回に山川氏にわれわれの旅を記していただきましたが、今回は特にジェノヴァのデイセンターとグ

ループホームについて報告したいと思います。

心理士のナンニ・トゥリア先生の案内でわれわれがたどり着いたのは、ジェノヴァ郊外のピサーニョ渓谷にあるデイセンター（centro diurno）でした（写真1）。山腹にあって、とても見晴らしの良いこのデイセンターでは、基本的に朝の8時～8時半頃に利用者さんたちがバスでやってきて、週1回のフィットネスやプールなどの運動を1時間ほど行ったり、プロのインストラクター2人を交えて、表現活動として演劇をして過ごし、1階の食堂（写真2）でお昼を食べた後、14時半頃にはまたバスで帰宅するというスケジュールになっています。この日中に行う活動では、だいたい8～10人程度で一つの活動を行い、必ずオペラトールと呼ばれる作業療法士が一人付き添います。そして、その活動の後、毎回利用者さんとその家族、そしてスタッフがディスカッションを行うことで、次の活動を選定したり、利用者さんの状態を把握したりすることに努めます。

われわれが日本で訪問した精神医療施設のデイケアでは通常マイクロバスによる送迎が行われており、それが保健サービスの一環ととらえられていましたが、このピサーニョのデイセンターでは送迎は行わず、いわゆる公営バスでの訪問・帰宅が義務づけられており、一人で通うためのトレーニングも行われているとのことでした。これはまさに公共交通機関を利用して生活するための自立支援であり、スタッフもそれを強調しておられたのが印象に残っています。また、利用者さんの中で認知障害と自閉症を抱えている男性がおり、彼は毎日8時半にデイセ

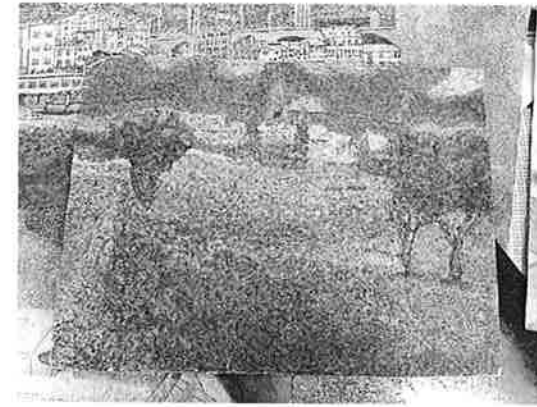


写真3 利用者さんの描いた絵



写真4 「大蛇」の外観



写真5 グループホームの部屋



写真6 部屋の扉に貼られた貼り紙

ンターに来て、誰とも話さずに絵だけを描いて帰るそうですが、その絵はジョルジュ・スーラのような見事な点描画で（写真3）、芸術的にも非常に高度な才能があることをうかがわせました。

その次にナンニ先生に案内していただいたのは、ピサーニョ渓谷周辺の市街地にある「大蛇（serpentone）」と呼ばれる横長の巨大な集合住宅の何部屋かを市が借り上げたグループホームでした（写真4）。ここは、精神保健センター（CSM：centro di salute mentale）からの紹介で、精神障がい者だけではなく、生活保護の受給者や身体障害を持つ人々も居住することが可能となっています。われわれがお邪魔したのは、そのうちの向かい合う2棟のグループホームで、片方には男性が2名、女性が3名住んでいました。その一つの非常に整頓された部屋で彼らと歓談し（写真5）、共同生活を行ううえでどんな工夫がなされているかをインタビューしました。例えば、料理は男性と女性が持ち回りでつくり、

必ず4人で（時にはオペラトールを交えて）食事することや、お互いの行き来を頻繁にするために常に部屋を綺麗に片づけておくこと、などさまざまな工夫が入居者の側から自発的になされているようでした。特に印象に残ったのは、女性の入居者の一人が異性との共同生活（と言っても、棟は隣同士になっていますが）に対して神経質になり、お互いの部屋を行き来するためのドアに「朝8時以前にはロックしないようにお願いします」と書かれた紙が貼られていたことでした（写真6）。

この日は、それ以外にも市街地にある別のグループホームにも案内していただいたのですが、ナンニ先生によれば、こうしたグループホームに住む患者さんたちはもともと別のところに住んでいたのですが、治療の一環として家族と離れてこうした共同生活を営むようにCSMが支援しているそうです。例えば、ある30代の男性居住者は、もともとアルコール中毒で、先に訪問したピサーニョのデイセンター

## おわりに

ここに至って、ようやく最初の筆者の問いに対する答えがおぼろげながら見えてきたようです。コミュニケーションに障害を持つ人々に対して過剰に神経を使っていた筆者の姿は、なんとかして「正しい」コミュニケーションの場へと導こうとする自分自身の思い込みが露となった姿でした。その不自然さは、障害に対する知識や経験が足りないからでも、彼らと接する時間が足りないからでもなく、自然な会話とはかくあるべしと決めつけ、そうした理想的な会話の場を演出しようとするところから生じていたのです。そもそも、彼らもわれわれも複数の自己を生きる存在であり、いつだってそうした現実の只中にいます。彼らの自己志向的な会話に表面的な理解を示すだけでは、彼らを自立しないコミュニケーション主体としていつまでも施設の中に、ひいては彼ら自身の認知世界の中に閉じ込めてしまうことになるでしょう。コミュニケーションはいつもうまくいくとは限りません。そうした他者とのちょっとした齟齬や軋轢が彼ら自身にとって目に見えるかたちであられること、そして次の機会にはそれを解消できるように自己の発言や振る舞いを調整していくこと。こうした手立ての中にコミュニケーションにおける〈自立と支援の弁証法〉が含まれていると信じて、今後の研究を進めていきたいと考えます。

## 文献

- 1) 山梨正明：認知文法論。ひつじ書房、1995
- 2) Bateson G, Jackson DD, Haley J: Toward a Theory of Schizophrenia. *Behavioral Science* 1: 251-264, 1956
- 3) 岡本雅史：認知的逸脱に基づくアイロニー発話のタイプロジー。日本認知言語学会論文集 第3巻, pp1-11, 2003

## 岡本雅史 (おかもとまさし)

認知言語学者。成蹊大学理工学部情報科学科、共同研究員。大阪市出身。早稲田大学政治経済学部卒業、京都大学大学院人間・環境学研究所博士後期課程修了。博士(人間・環境学)。日本学術振興会特別研究員、東京大学情報理工学系研究科PD、東京工科大学片柳研究所客員准教授を経て現職。認知語用論の立場から言語・非言語コミュニケーションの研究に従事。

に自宅から通っていたのですが、前年の夏に母親に暴力をふるって一時的に收容され、われわれが訪れた10カ月前からこのグループホームに住んでいるとのことでした。ナンニ先生が強調していたのは、こうしたグループホームに長期的に居住させるのではなく、なるべく速やかに退去することができるように仕向けていくことが肝要であることで、そのために必要なスタッフの配置と自立支援の策定に日夜取り組んでおられるということでした。

## 地域医療における自立と支援の弁証法

こうしたジェノヴァでのデイセンターやグループホームの見学、および利用者さんたちとスタッフの皆さんとのインタビューを経て筆者が感銘を受けたのは、「自立」と「支援」という一見矛盾する2つの課題をどのように実現すればよいかという問題に真剣に取り組む医療スタッフと利用者さん自身の姿でした。先述したように、ピサーニョのデイセンターではそこに「通う」という日常的な営みを各人が自立的に行うことが期待され、そのトレーニングも行われています。そして、グループホームは入居者にとって居心地の良い終(つい)の住処ではなく、そこからの“卒業”が奨励されています。こうした地域医療におけるサポートは、常に障がい者の「自立」を目指して行われています。そして、そうしたサポートを受ける障がい者の側でも、同じ境遇にある者同士での共同生活を通して、互いに協力し合ってスムーズに生活を行いつつ、同時にそれぞれのプライバシーやテリトリーを尊重するための工夫を編み出すことで、「自立」が単に「一人で」生活を送ることではなく、社会の中で他者と「共に生きる」ことの中にあることを学び取っているのです。

このことをコミュニケーション研究の観点からとらえ直すとすれば、「支援する」ことと「自立させる」ことが互いに矛盾するようなダブル・バインド状況になっているのではなく、「支援する」ことの中には常に「自立させる」こと、究極的には「支援しなくてもよい」状態にさせることが目指されているのだと言えるでしょう。これを〈自立と支援の弁証法〉と呼ぶとすれば、単に障害を持った人々への支

援に限らず、いわゆる親子関係や教育現場などでも本来的に目指すべき関係のあり方でもあります。例えば、親が子どもを養育するうえで、子どもは親に精神的にも経済的にも依存するというかたちを取りますが、その最終目標は自分が死んでも子どもが自立できること、つまり親に依存しなくて済むように自立させることです。言い換えれば、親に「依存させる」ことを突き詰めることで親に「依存しない」ように仕向けるわけです。このことを見誤ると、親子関係は直ちに、依存に依存するマザコンやファザコン(親の側では「親ばか」)に墮してしまいます。また、教育現場においても、真に優れた教師は自分の知識が必要でない状態にまで生徒を引き上げることを目指します。したがって、なんとなくわかった気になる教育よりも、むしろ自分で考える機会や能力を与える教育のほうが尊ばれるのは、この〈自立と支援の弁証法〉に沿えば当然理にかなっているわけです。

## 「一人で」と「一緒に」—コミュニケーションにおける自立と支援を目指して

このように〈自立と支援の弁証法〉は、親子や教育現場、介護場面など、社会的に非対称な関係には必ず存在していると筆者は考えます。もちろん、重度の身体障害や認知障害に見られるように、文字どおりの意味での「自立」が不可能な場面は多々あることでしょう。そこを横断するのが、「一人で」生きることと「一緒に」生きることの間のコミュニケーション的つながりです。

ジェノヴァのグループホームの居住者さんたちが共同生活を行ううえで自発的に編み出したルールは、われわれ誰しもが「一人で」では生きられないこと、そして誰かと「一緒に」生きていくしかないこと、それにもかかわらず「一人で」でいられる余地が必要なこと、というやはり矛盾した課題を抱えていることを浮き彫りにしました。われわれが他者とのコミュニケーションの中で行っているのは、自分が認知した世界を他者と共有しようという営みです。もし、われわれが他者と知覚を完全に共有しているようなSF的な世界を想像してみれば、そこには誤

解や偏見などは生じようもないのと同時に、そもそも語り合うことすら不要です。こうした意思疎通の必要のない世界をユートピアとして夢想する人もいますが、もしそのような世界が実現したら、他者と一瞬でもつながったという幸福感もまた存在しはずです。われわれはコミュニケーションを通じて他者とつながることで互いの知識や経験を共有し、また新たな共有の対象を求めて自分の認知世界に戻っていきます。こうして「一人」でいることが誰かと「一緒に」生きることへと還元され、またその共有した知識や経験を蓄えるために「一人」に戻れる場所を必要とするのです。

コミュニケーション障害を抱える人たちは、こうした「一人で」生きることと「一緒に」生きることが不即不離の関係にある現実を持って余しているように筆者には思えます。そこから、われわれがどうやってそうした現実に対処しているかと考えてみれば、実は複数の「場」にいること、そしてそれぞれの「場」において立ちあらわれる複数の自己を引き受けていることなのではないでしょうか。この「場」の意味するところは、単に職場と家庭といった社会的・物理的な場所にとどまらず、先述したようなコミュニケーションによって共有される空間と個人の認知世界という心理的な空間も含まれます。われわれは日々の生活の中でこうした複数の場を往来し、複数の自己を生きているのです。

ピサーニョのデイセンターでたった一人で絵を書き続けている自閉症の青年は、それでもデイセンターに「通う」ことを選択しています。スタッフの人たちは彼を無理やりに利用者とのコミュニケーションの場に引き込もうとはしません。「一人で」いられる「一緒に」の空間。絵を描くことを通してその場を生きること、徐々に彼が生きていかななくてはならない現実への適応を促しているように筆者には感じられました。『コミュニケーションの国』イタリアで、実は本当に大事にされているのは「コミュニケーションしなくてもいい」場所を自然に与えることだったのです。一人でいられるために支援すること、この〈自立と支援の弁証法〉は燦々と太陽に照らされた港町ジェノヴァでさり気なく実践されていました。